第１回小千谷リビングラボ（仮称）結果報告

１．趣旨・目的

中心市街地の活性化を目的として、本町一丁目の旧小千谷総合病院跡地に図書館等複合施設の整備を進めている。施設の整備段階から、新しい施設の活用方法や地域の価値・課題などについて、市民と行政が共に考えていく場として「小千谷リビングラボ」（仮称）を立ち上げ、オープン後の施設の活用につなげていく。

２．実施日時

令和３年３月 21 日（日）13 時 30 分～17 時 00 分

３．実施会場

総合産業会館サンプラザ３階大ホール

４．参加者

73 名

５．配付資料

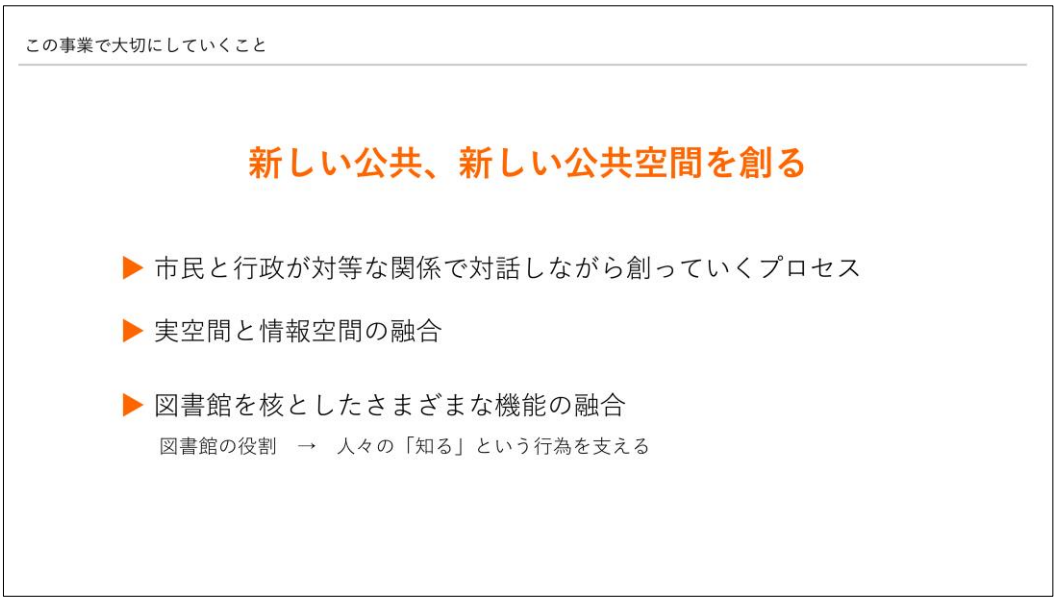
・第一回小千谷リビングラボ（仮称）　まちと公共施設の未来をともに創造する
・事業についての説明
・事業指針

６．プログラム

第１回「小千谷リビングラボ」（仮称）

1.共有	1. 開会の挨拶	13:30-13:35（ 5分）
	2. 事業についての説明	13:35-13:45（10分）
	3. リビングラボについて	13:45-13:55（10分）
2.対話創造	3. オリエンテーション	13:55-14:10（15分）
	4. 自己紹介・アイスブレイク[グループワーク]	14:10-14:30（20分）
	5. 対話「リビングラボのあり方」[グループワーク]	14:30-15:30（60分）
	（休憩 10分間）	
	6. 「リビングラボ」（仮称）の愛称を考える[グループワーク]	15:30-16:00（30分）
	（休憩 5分間）	
3.共有問い	7. 全体共有	16:05-16:25（20分）
	8. まとめ	16:25-16:30（5分）

－　事業についての説明　－



建設課都市整備室：土田

この事業は、病院跡地に図書館を核とした複合施設を整備し、中心市街地の活性化を図るプロジェクトであるが、その根幹には、新しい公共、新しい公共空間をみんなで創っていこうということがある。

これまでのような行政が公共施設をつくり、それを市民のみなさんが使用するといった「提供－消費」の関係ではなく、市民のみなさんと行政が対等な立場で対話しながら想いも共有しながら一緒に創っていく、そうしたプロセスを大事にしていきたい。設計段階からお互いの違いを認め合いみんなで考えていく対話の場がこの「小千谷リビングラボ」（仮称）である。でもこれはとても難しいことである。市民のみなさんも我々行政職員も意識を変えて取り組まなければならない。

また、私たちの暮らしは、もはやウェブを中心とした情報ネットワークによる情報空間と密接に絡み合っている。新型コロナウイルス感染拡大以降は、急速にそうした世界がさらに広がった。実空間と情報空間の融合にも取り組み、新しい公共空間の整備を進めていく。

そして、この施設では様々な機能の融合を図っていくが、核となる図書館機能については、人々の「知る」という行為を支えることを重要な役割として重視している。本や資料を読む・調べるだけでなく、デジタルな情報を扱う、体験する、表現する、分かち合う、コミュニケーションすることも「知る」という行為として捉えている。そうした行為を地域の情報拠点である図書館が支えていくことをこの事業では大事な役割としていることが理解できると、新しい施設の見え方が少し違ってくるのではないかと思う。

－　小千谷リビングラボ(仮称)について　－

アカデミック・リソース・ガイド㈱：有尾

　昨年から小千谷市に関わらせていただいている。市民インタビューやシンポジウムにお越しいただいた方だけでなく、今日初めてお越しいただいた方もいてとてもうれしく思っている。この場を楽しんでいただいて、次もまた来たいと思えるものにしていきたい。

この事業で大切にしていくこと

小千谷の暮らしをリ・デザインする

旧小千谷総合病院の跡地の新たな活用で
新しい魅力とまちの活力を生み出し、
市民の暮らしをより良くしていくことを目指していきます。

共創、やわらかな官民／公民連携

共創

小千谷市や事業にかかわるさまざまな立場のひとが互いに情報を交流し、
思い（想い）を共有しながら市民とともにかたちづくる
「わたしたちの」新しい施設づくり、まちづくりを目指します。

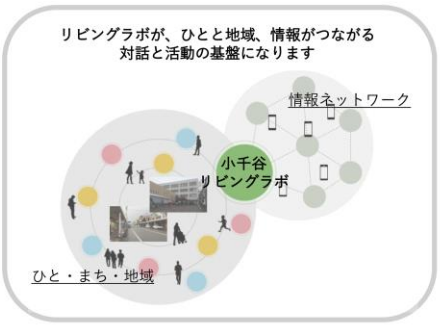
やわらかな官民／公民連携

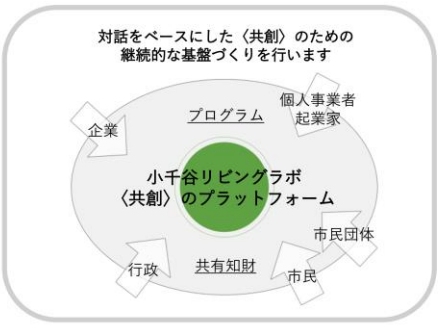
＜硬い（固い）かたち＞

規則や慣習（既成概念）などで縛る、一度決めたことは変えることができない、
一方向のコミュニケーション、移動の自由・変わる自由がない、等

そうした**束縛や不自由さに制限を受けない自由の確保された「やわらかい」事業や場のあり方**、また**市民がだれでも参加できる間口の広さ・敷居の低さ**の実現を目指していきます。

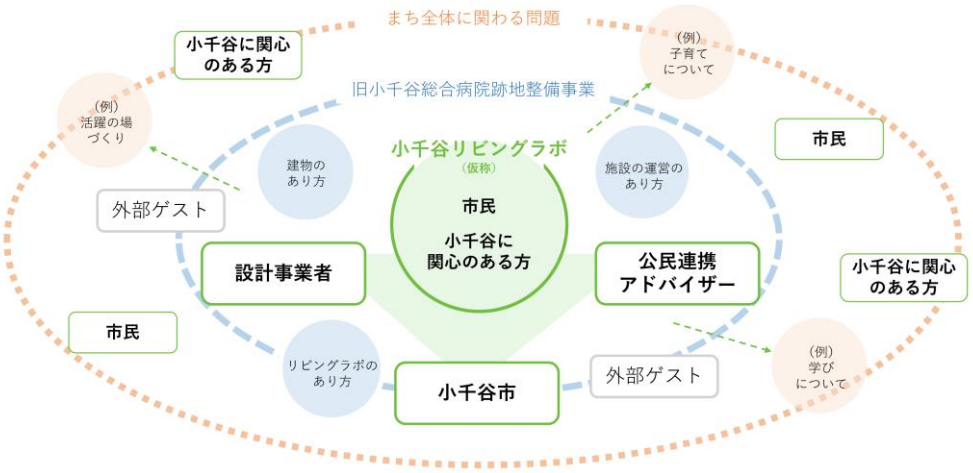
さまざまな価値を持ち寄り、対話・創造しながら、
本事業だけでなくまちの課題の発見・共有・解決を目指していきます。





- **「共有」「対話」「創造」**の3つの要素を組み合わせたプログラム
- **市民がともに考え、ともに動かしていく継続的な体制**を目指していく
- ひらけたかたちでの運営や、参加者が立場や所属の枠組みにとらわれない、**自由に対話のできる場づくり**を重視する

小千谷リビングラボ（仮称）のイメージ



－　自己紹介・アイスブレイク　－

自己紹介・アイスブレイク

自己紹介（5分）

名札に書いた「呼ばれたい名前」をグループ内で共有

アイスブレイク（15分）

［共通点探し］

2人1組のペアになり、相手と自分の共通点を10個見つける。

➡全てのペアが共通点を見つけられたら、その共通点を、グループ内で発表する

－　対話「小千谷リビングラボ(仮称)のあり方」　－

対話「リビングラボのあり方」 進め方

問い決め（5分）

以下の問いから、グループ内で一つ多数決で選ぶ

①小千谷市で年齢や性別、考え方等の違ういろいろな人と活動するために大切なことは何か？
②まちの未来を描くために、リビングラボのなかでどんなことを学んでいくとよいだろうか？
③身近な話し合いの場で、言いたいことを言えなかった経験はあるか？それはなぜか？

対話（50分）

選んだ問いをもとにグループで対話する

※日常とのつながりを意識して考える。
※対話のルールを意識する。

対話のルール

9つのルール

- 何を話してもいい。意見が変わってしまってもいい。
- 人の言うことに対して否定的な態度をとらない。
- ひととの対話の時間を大切する。発言は1回につき1分におさめる。
- 発言しないで黙って聞いて考えているだけでもいい。
- お互いに問いを投げかけることが大切。
- 知識ではなく、自分の経験にそくして話す。
- 話がまとまらなかったり、わからなくなってもいい。
- みんなで黙ってもいい。
- まとめなくてもいい。

○発 表

Ａグループ（12 名）

コーディネーター：田中

20 代～80 代まで年齢層に幅のあるグループだった。テーマ①と②を併せて対話した。立場を超えて一市民としてこうした場に参加することが大事である、年代を超えた問題を共有して色々な意見を出し合うことが大切ではないか、新しい施設で色々な人と交流したい、稼げる施設になったらいいとの声があった。閉鎖的ではなく、活動が見え開かれた施設が望まれる。新しい施設に対して熱い思いを持った人たちであった。

Ｂグループ（14 名）

コーディネーター：平賀

　テーマ①について対話した。②③についても話題となった。目指しているものは同じでもやり方・暮らし方が異なることが大きな齟齬を生んでいる。普段、自分より若い人たちがどんなことを考えているか何をしているかわからない。そもそも世代の異なる人たちを知る機会がない。どうしたらいいか。家と職場の行き帰りだけでなく、中間的な居場所があると異なる人が見えるようになるのではないか。そうした場や機会が必要である。そこはどういうところかと言えば、一人一人にとって居心地のいい場所であることがまずは大事である。その居心地の良さの結果、そこに誰かがいつもいるとか、そういう場や機会がまちなかにあるといい。でも場所・人があるだけではしょうがない。その先は何かと言えば、何かコトが起きている状態がみんなに見えていることが大事であるという話にもなった。リビングラボのような話をする場であるとか、違ったものが見えるとか、そうしたことをもっと大事にしていきたいという話であった。

Ｃグループ（11 名）

コーディネーター：土田

　テーマ①について対話した。グループ内からはこのテーマを選んだ理由として、自分の経験として話しやすい、この事業で掲げる「融合」の答えは“人”でありそれに直結する、公共施設は多様性を尊重しなければいけないことから色々な視点で話せることが挙げられた。初めに「なぜ（公共施設では）多様性を許容する必要があるのか」という問いを置いた。みんなの税金を使って作られているから、図書館は様々な情報が日々更新されていく場であり多世代が利用することで成長する場であるからといった話が出た。そこから若者が率先して利用できる場所になると良いという話にもなった。今の若者は何を考えているかわからない、直接声を聞けるような場があるといい。でも今日のような対話の場は、関心があっても大人でも躊躇するくらいであるからなかなか参加しづらい、参加したとしても大人の前で建前の話しかできないのではないかという話が出た。でも、結果的にこうした場に参加できなかったとしても、例えば高校生が社会人になりやがて子育て世代になるなどライフステージを重ね、この施設を利用したいと思ったときにやりたいことを実現できるような、つまり、いつの時代になってもそのときの利用者の主体的な行動に応え続けられるような空間としての柔軟性が公共には必要であるという話になった。その柔軟性が居心地の良さにつながり、みんなの居場所になればいい。

Ｄグループ（11 名）

コーディネーター：有尾

②のテーマについて対話した。グループの中で旅行業をされている方がいて、この（コロナの）困難の中でどうしたら旅行に行ってもらえるのか聞いてみたいというお話しから対話が始まった。みなさんの答えとしては、受け入れ態勢がしっかりしていれば安心して旅行に行ける、市内には色々な魅力的な場所、来てほしい場所が沢山あるという話が出ていた。食事を楽しむなど目的は色々あるものの、それが来てもらうための情報としてしっかり届いていないというのが一つの課題であるという話にもなった。それをどのように届けることができるか。若い人はスマホを自由自在に使っている一方で、便利なことは分かっているがどのように使えばいいかわからない年配の方もいる。若い人が他の人に教えることで役立てたり、生かせたり、助けられたりすることをつなげていくこと、各世代が得意なことを持ち寄って新しくできることを増やしていくような関係性をつくることができるといいという話になった。もう一つ、小千谷には大きな川があるので氾濫がとても心配だという意見も出ていた。そうした心配の気持ちをみんなで共有し合える場所であるとか、一緒に考えることでベストな答えを考えていけるような関係づくりも必要ではないかという話も出ていた。スマホの話にも関わってくるが、高校生たちの会話を聞いているととても面白そうなことを言っているけれども、なかなか接点がない状況がある。それが場として空間を共有することで何かつながりを生んだり、関係性をつくっていけるといいという話があった。

Ｅグループ（11 名）

コーディネーター：李

テーマ②について選択したが、①③も当然大事という話になり、テーマとして挙げるのではなく、今日の対話そのものの実践として考えることとした。ただ、いきなり「どんなことを学んでいくか」を考えるのは難しい。まずは「まちの未来」という言葉からイメージするキーワード、あるいは問題点や課題を挙げようというところから話を始めた。その中で、高齢者が集まる場所、子どもを預かる場所が今（市内には）あまりないので、そうした子どもやお年寄り、色々な人たちが一堂に集まれる場所が未来にあるといいという話になった。そこから今の高校生はどんな場所に行っているのかという話になり、（グループ内の高校生に聞いたところ）クレープハウス星野屋しかないとの回答だった。でももう一つ星野屋をつくるわけにはいかない。だからこそ、みんなが集まるというのはどういうことなのかをみんなで学んでいく必要があるのではないかという話になった。それ以外に、市外から人が来

るような地域、施設になると良いのではないかという話にもなった。市外からも人が来るためには駅周辺の活性化も考えていかなければいけない。さらに言うと本町通りも今の状態では寂しいため、この施設づくりの中で関わりをもって考えていかなければいけないという話になった。交通手段も併せて考えていかなければいけないという話も出た。さらには、病院があったことを知っている人たちは、病院から見える景色であったり、あの場所自体がある種のランドマーク的な役割になっていたことを体験として知っているが、グループ内の高校生はすでに病院は無くなっているのでそれを知らない。そうした小千谷に元々あったが無くなったものをもう一度考え直して、まさにそうしたことを学んでいくべきではないかという話もあった。

また、図書館をつくっても魅力がないので人が集まらないのではないかという話もあったが、いま日本中に色々な図書館があるというお話をさせていただいた。それを知っている人もいれば、なかなか見る機会がない人もいる。そうした見ている人知っている人が情報を持ち寄って勉強していくことはできる。その延長でみんなで視察に行けるとしっかりとイメージが共有できていいというお話が出た。みんなで視察に行けるようなことができればベストだと思う。それが難しくてもできること、情報を集めて共有する、みんなで調べるなどそうした学びはできるのではないかという話になった。

Ｆグループ（11 名）

コーディネーター：小池

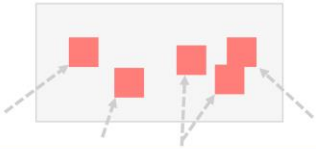
　最初に、小千谷を何とかしたい、もっと良くしたいという思いをもって集まっている人たちであることの確認から話を始めた。テーマは①を選んだ。色々な人がいる中で小千谷をどのように変えていけば良いか。その阻害要因について、経験を踏まえお話しいただいた。ある時、年配者に若い人が集められ、気になっていることを何でもいいから話してみろと言うので全員が本音を出したところ叱られたという経験を話す人がいた。こうしたことは割とありがちな話ではないだろうか。そうではなく、その違っていることを前提にして排除することにならないように、色々な違いを受け止める、最後まで話を聞いてそのうえで対話を行うことが必要ではないか。そうしたことをリビングラボの中で大切にしていきたいという話になった。これまで新しいことをしようとするときに出る杭を打つ、閉鎖的な感じがしていたが、今日ここに来てきちんと対話をすれば聴いてくれる人がいることが分かり少し元気が出たという話もあった。対話に留まらず、それをどう行動にするかが大事であり、自分が経験したことを外に出しながらそれらの知見を共有し、みんなで作り上げて行動していく、そういう場にリビングラボをしていきたいという話になった。

－　小千谷リビングラボ（仮称）の愛称を考える　－

「リビングラボ」（仮称）の愛称を考える　進め方

愛称案出し（5分）

各自愛称案を付箋に書き出し、
ホワイトボードに貼る（複数案可）



対話（25分）

愛称案を出し合いながら、絞り込みもしくはグループとしての新たな愛称案を検討する

出てきた愛称案を、後日市民投票を行い決定します！

〇発 表

Ａグループ

「ふりーぢゃルーム ww」

読み方：ふりーぢゃるーむ わらわら

意味：「フリーディスカッション」＋「おぢや」＋「わらわら（笑）」。

Ｂグループ

「ネオハルおぢや」

読み方：ねおはるおぢや

意味：小千谷で「根を張って」暮らしている人たちの知識やアイディアが集まって大きく育ち、「新しい（＝ネオ）春（＝ハル）」を迎えることができるといい。

Ｃグループ

「おぢやわいがや」

意味：わいわいがやがや。

「あっぷっぷ」

意味：ＵＰ（上がる）、気分が上がる→笑顔になる。

Ｄグループ

「おぢやワイワイラボ」

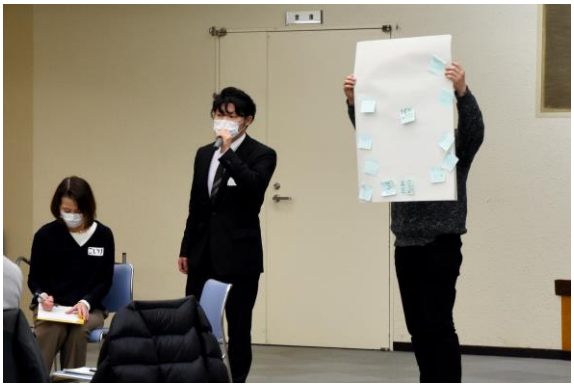
読み方：おぢやわいわいらぼ
意味：賑わいが見える、ワイワイ騒ぎながらこれから始めていこう！

Ｅグループ

「at！おぢや」

読み方：あっと！おぢや
意味：高校生のアイディア。「at」（アット）には、一点に集中する、集まるという意味がある。みんなが一つの場所に集まって話し合い、最終的には老若男女が集まる施設になって欲しい。「あっと」驚くようなアイディアが取り入れられた施設になるといい。

Ｆグループ



「おぢまちキャンパス」

読み方：おぢまちきゃんぱす
意味：小千谷市民だけでなく、世代を超えて誰でも参加できるようなフィールド。

多数決で市民投票候補を決定

① ふりーぢゃルーム ww　② ネオハルおぢや

③ at！おぢや　④ おぢまちキャンパス